

IIRA 創立 50 年を振り返って

花見 忠

(上智大学名誉教授, IIRA 前会長)

1 IIRA の創設

IIRA (国際労使関係協会) は、1965年に B. C. Roberts, John Dunlop, Gerald Sommers に中山伊知郎の4名 (founding fathers) によって設立され、昨年は50周年にあたる。近時、歴史認識がしきりに問われているが、IIRA としても、この半世紀間における労使関係論の変遷を辿ってみる必要があろう。

実は、今から約10年ほど以前に、当時のIIRAの officers であった M. Weiss, A. Valdez と筆者 (の歴代 presidents) に事務局長であった T. Fashoyin の4名の間で、IIRA 設立40周年を記念して、40年の活動を総括する為の書物の発行を企画し、執筆者の人選を行い、この結果として、B. E. Kaufman によって執筆された772頁に及ぶ大著 *Global Evolution of Industrial Relations: Events, Ideas and the IIRA* として、ILOによって出版されている (花見忠「紹介・ブルース・E. カウフマン『労使関係のグローバルな進展——出来事、理念とIIRA』」日本労働研究雑誌 No. 548, 参照)。

しかし、50周年に当たる昨年来、何らかの企画がなされているとは寡聞にして聞かない。

そこで僅か10分間の報告では、意を尽くすことは到底不可能であるが、偶々この1, 2年の間に、IIRA の歴史に大きな足跡を残した B. Hepple と R. Blanpain という二人の巨匠が相次いで世を去った今日、この50年間の研究者達の足跡を含めて、以下簡潔に50年間の世界の労使関係における理論的課題の推移を概観することとする。

2 論点の推移

(1) Dunlop の “divergence v. convergence”

(2) Bruce Millenn (『新興国における労働組合の政治的役割』)

(3) B. Aaron, K. W. Wedderburn, F. Schmidt, T. Ramm etc. の第1次比較労働法グループ (1960, 70年代) 西欧諸国における労使紛争処理の比較研究

(4) R. Blanpain, B. Hepple, St. Antoine, M. Weiss, T. Treu, M. Biaggi, J. Rojot, T. Hanami etc. の第2次比較労働法グループ (1970年代~) このグループは、*International Encyclopedia of Law* の中核部隊の役割に加えて、100冊に近い労使関係の研究書を出版

しかし、Hepple と Blanpain の相次ぐ逝去は、このグループの終末を象徴するようにも思える。次世代の台頭が期待される。

3 IIRA におけるこのグループの特質

(1) ケミストリーの同調

(2) 人種的偏見の欠落

(3) 政治論議の欠落

(4) 家族ぐるみの交流

この4点がグローバルな研究推進の決め手となって、筆者は唯一の非西欧人として late comer としての advantage を享受することが出来た。なお、拙稿「30余年に及ぶ友の思い出——Roger Blanpain と Bob Hepple の早すぎた逝去を悼んで」日本労働法学会誌 130号 (2017年11月) を参照。

はなみ・ただし 上智大学名誉教授, IIRA 前会長。最近の論文に *Labour Law and Industrial Relations in Japan*, Kluwer, 「東と西の架け橋を夢見て」*Work & Life* (世界の労働) 2017年, Vol. 3. 労働法, 労使関係論専攻。